

消 息

「近世の医学と福岡の医家」展報告

一九九七年九月二十日より、福岡市博物館において第九回日本医史学会福岡総会(期日平成九年十月十、十一日)を記念して「近世の医学と福岡の医家」展(福岡県医師会ならびに福岡市博物館共催)が始まった。同日午前九時より、蒲原宏日本医史学会理事長、杉岡洋一九州大学総長(学会会長講演は、「九州大学医学部の誕生とその関連医学史資料について」であった。代理発表曾田豊二福岡大学医学部名誉教授)、福岡藩武谷家(元立、祐之父子は藩医学校養生館の設立に尽力)や原家(解体新書に先だつて、六代三信はレメリンの解剖学書を翻訳。今回の展示案内ポスターはこの解剖書をモチーフにして作成)の御子孫の方々等の御参列をいただき、開催記念式典を挙行了した。本年度の学会会長でもある関原敬次郎県医師会長(代理)の開会挨拶に始まり、県知事ならびに市長(ともに代理出席)の祝辞、蒲原理事長の祝辞と続き、代表者によるテープカットによつて、一ヶ月間にわたる医史学展の幕が切つて落とされたのである。

この展示は、地理的な関係から古来より、直接的にあるいは長崎を経由して間接的に海外文化輸入の窓口となつた福岡

る二千年の医学の歴史」であつた。



の地にあつた医家が、日本医学の発展に大きく貢献してきたことを紹介すべく企画したものである(学会の特別講演1が、奥村武氏の「福岡にお

一六世紀の南蛮流医学の移入に始まり、カスパルーシャムベルゲル、原三信(六代)、貝原益軒、亀井南冥などを紹介しつつ、藩医学校「養生館」創設に関わつた百武万里や武谷祐之等を紹介展示しており、一巡すれば久留米を含めた福岡における近世の医学の流れと福岡の医家の日本医学への貢献が理解できるように配置した。中央部分には漢方医学の展示学会特別講演IIが、小曾戸洋氏の「日中医薬文化交流史」であつたと、翻訳を通じて日本医学に多大の影響を及ぼしたヴェザリウス、パレならびにワルエルダが著した貴重図書(九州大学医学部附属図書館所蔵)と近世医学の先達(山脇東洋、前野良沢、宇田川玄真、大槻玄沢)とその解剖書(藏志、解体新書、医範提綱、重訂解体新書…京都市和田和代史氏より借り受けた)を展示した。当地の古くからの医者の家系である原家の第六代三信の訳した解剖書と、教科書的にも有名な「解体新書」をはじめとする江戸期の解剖書の展示は、とくに一般の方々の目を引

いたようであった。医史学展開催期間中に向かい側の展示室で、期間を同じくするように興福寺国宝展が開催されていたこともあり、延べ三八、四九四人の入場者があり、一般の方々この分野への関心の深さを窺い知った次第である。また光栄な事に、医史学会総会に来福された会員の方々にも多数見学して頂き、多くの方々から「立派な展示会だ！」とのお褒めの言葉を賜りました。

最後になりましたが、成功裡に閉幕した今回の医史学展に心良く貴重な資料をお貸し頂いた方々に対しましては、心よりの感謝の念に耐えません。この方々のご厚意が無ければ、今回企画した医史学展の開催は到底不可能なものでした。ご誌面をお借りして、重ねてお礼申し上げます。

(「近世の医学と福岡の医家」展開催準備委員 佐藤 裕)

「種痘医 北城諒齋顕彰碑」除幕式

平成九年はジェンナー牛痘種痘発明二百年にあたり、十一月三日、栃木県大田原市保健センター敷地内において、那須地区種痘の先覚者北城諒齋顕彰碑の除幕式が挙行された。

この年、新制那須郡市医師会(阿部敏夫会長)は創立五十周年を迎え、その記念事業の一つとして記念碑を建立したもので、当日は午前八時四十五分関係者二十数名が除幕式に参列した。また二日、三日の両日、那須野が原ハーモニーホールで、本学会々員二宮陸雄氏の企画による「種痘医 北城諒齋



生碑同志文」が、また裏面には諒齋の業績を讃える文が彫られている(別掲)。

北城諒齋(一八二二〜九一)は大田原城下で生まれ、二十八歳の時江戸に出て、日本に輸入されたばかりの痘苗を苦心の末に入手、二年後の嘉永四年に那須において初の牛痘種痘を行い、その普及につとめた。その後、諒齋らの努力により、明治七年には県内に十一カ所の種痘所が設置された。

参考文献

- (一) 二宮陸雄『種痘医北城諒齋 天然痘に挑む』一九九七年五月刊、平河出版社
- (二) 那須郡市医師会編「那須郡市医師会のあゆみ 新制五十周年記念」一九九七年十一月刊

(日野原 正)